

経済学博士木下彰君の「名子遺制の構造とその崩壊―農村に

おける封建的労働の構造分析―」に対する授賞審査要旨

本書の主題を構成する名子遺制とは、戦前の日本農業における二つの基本型のうち、いわゆる近畿型に対する東北型の、そのもっとも遅れた形態ともいふべき名子Ⅱ徭役制度を指している。これは戦前日本資本主義の構造把握に関連して重要な問題点となってきたものであるが、本書で著者は、経済社会学的見地を背景に、その存在と解体過程の実証的究明とその社会経済的意義の検討を試みている。

本書は、次のような三部分から構成されている。

第一部は、名子遺制のいわば総括的把握である。まずはじめに、名子制度の歴史的特質を論じる。そもそも封建社会においては、身分的隷属関係の基礎の上で、隸農は領主から土地を分給され、その持地で自足的経済を営むとともに、一定の日数領主の手作地で労働に服したのであるが、旧南部領を中心とする地帯には、地頭Ⅱ名子の身分関係にもとづく、そのような旧い名子Ⅱ徭役慣行が、徳川時代のみか明治以後までも長く存続してきた〔原型的な名子〕。それとともに、この地帯では、徳川時代以降貨幣経済と高利貸付の浸透によって凶作時に土地や家屋の質流れが行われるようになる、その結果として原型的名子の慣行にならって、債務隸農の性格をもつ名子Ⅱ徭役慣行が新たに作り出されてくる。そしてこの新しい慣行も明治以後長く存続してきた〔非原型的、新型名子〕。

このような歴史的事実を踏まえた上で、著者は、昭和初年のこの地域における名子遺制の地域的分布を確認かつ詳

説し、ついで、名子的隷農残存の社会経済的および地理的根拠を、また他面でそれが日本資本主義の展開に対しても意義を検討するとともに、名子遺制自身がそれに照応して変容し変質していく様相を実証しつつ、戦後の農地改革によるほぼ全面的な解体にまで説き及んでいる。

第二部は、いわば類型論の展開である。著者は、第一部における成立事情や内部構造の検討を踏まえて、名子遺制を次のような二つの類型に区分し、それぞれをさらに立ち入って分析する。

第一は、古い封建的な身分的主従関係を絆にして成立した原型的な名子である。旧仙台領岩村家（美濃の斎藤氏の出）と旧南部領豊間根家（前九年の役の安倍一族の出）の場合がその典型で、いずれも敗残の主従が僻陬の地に逃れて土着、開拓、従臣たちが名子となるという形で成立したものである。その内部構造にはやや硬直したものが見られる。

第二は、貨幣経済と高利貸付の浸透を背景に、第一類型の擬制として成立した、債務隷農としての非原型的な新型名子である。同じく名子制度と呼ばれるべきものではあるが、身分的隷属性や経済的合理性の点からみて、第一類型との間にはすでにかなりの差違が生じている。その典型は旧南部領の晴山家の場合であって、安永年間大野鉄山の経営にのりだした晴山吉三郎は、商業・金融・農耕・牧畜・山林・製鉄・製塩の多角的経営で豪富を積み、二代三代もよく跡をついで、天保年間には名字帯刀御免となり、大商人としての風格を築き上げた。各局面の経営に多数の名子を使役して、その手作地はかのユニカー経営をさえ彷彿させるものがあつた。

第三部は、名子遺制の解体過程を論究する。わが国における資本主義の成立・発展にともなつて山村名子地帯にま

で貨幣経済が浸透し、とりわけ林産物や労働力の商品化が行われるようになる、それによって地頭と名子間の対立が拡大し深化する。その結果、名子遺制は次第に変容と変質を余儀なくされ、ついに戦後の農地改革にいたって、改革の埒外におかれた林野の場合をのぞき、全面的に解体していくことになる。

この解体過程についても、上記の二類型の間には差違が認められる。すなわち、原型的名子使役の豊間根家、岩村家のような場合に比較して、非原型的名子使役の晴山家の場合には、経営の多角的構造のもつ内的な執拗な生活力によって抵抗と適応を示し、農地改革にも冷静に対処しえて、それによって名子遺制の崩壊過程における記録に値する一コマを形づくっている。著者はその過程を詳密に実証し、かつ社会経済的意義を検討している。

さて、以上のような叙述内容をもつ本書は、その成り立ちについて言えば、著者が長きに亘る学生生活の殆ど全期間を通じて心にかけて、幾度かの実態調査や広汎な文献研究を積み重ねてきた、名子遺制に関する研究論文七篇（昭和十一年～四十三年）を基礎にし、それに若干の補説を加えて、新たに体系化しようとしたものである。そうした事情のために、論述のなかに何ほどの重複等が見られなくもない。けれども、全篇を通じて経済社会学的見地からする論旨は立派に一貫しているばかりでない。著者は何よりも、多数の研究文献の博覧、名子帳その他膨大な古記録の精密な整理研究と丹念な実態調査による検証によって、研究の周到を期している。とりわけその点で精彩を放っているのは晴山家に関する論述部分だと言えよう。本書のもつ、そうした経済社会学的見地を背景とする実証の広さと深さは、なかならずく評価されて然るべきであろうと思われる。